



第39回

3つの顔で、  
障害を取り巻く世界を変える

# 初瀬勇輔

hatsuse yusuke

パラリンピックのメダルをめざす現役の柔道選手であり、さまざまなスポーツ協会の運営に携わる役員であり、さらには(株)ユニバーサルスタイル代表として障害者雇用促進にむけ戦う実業家——。

30代半ばにしてすでに3つの顔を持ち、障害者スポーツの発展に欠かせない人材として今後さらに期待されているのが、今回のゲストである初瀬勇輔さんだ。

浪人時代から大学在学中にかけて両目の視野を相次いで失い、中高時代に習っていた柔道に再び向き合うことで人生を大きく展開させた初瀬さんに、柔道との関わりのなかで得られたさまざまな教訓、パラリンピック出場の意義、そして2020年以後の障害者スポーツおよび障害者を取り巻く日本社会のあるべき姿などについて伺った。

聞き手／山本浩 文／高橋玲美 構成・写真／初瀬勇輔、フォート・キシモト

## スポーツ選手、協会運営、 実業の3足のわらじ

—— 現在、スポーツと実業のバランスはどのくらいですか？

最近では日本パラリンピアンズ協会の理事、日本視覚障害者柔道連盟の理事、全日本テコンドー協会の理事などさまざまなスポーツ関連業務に追われて、週の半分は代表を務める(株)ユニバーサルスタイルの仕事をしていないような状況です。それだけ2020年に向けて盛り上がっているということでしょうね。選手としての練習もままならない毎日です。

—— 競技団体の経営に関わる理事というお仕事が多いのは、やはり経営手腕を高く評価されて。それもあるかもしれないですね。視覚障害者柔道連盟では、選手と団体の橋渡しをしてほしいと仰せつかりまして。

—— 現場を知る人がそういった立場にいと、選手も組織運営側としても安心ですね。

板挟みですけどね。試合に行くと「初瀬、理事なんだから行ってきてよ」、運営側からは「初瀬、選手なんだから行ってきてよ」と(笑)

## 本の虫、武道に目覚める

—— 昔はあまり跳んだり跳ねたりの子どもではなかったようですね。

どちらかというと小学校低学年までは本の虫というか。図書館から本を借りてきて読むのが好きなインドア的な子どもでした。文字が書いてあれば何でもよくて、ジャンル関係なく読んでいました。

—— 体育は得意でしたか？

そんなに得意じゃなかったと思います。ドッジボールとか野球とか、小学校でヒーローになれるような種目はだめでしたね。それより勉強が得意で、女の子にモテるタイプではなかったです。ただ小学生のときに友達につられて空手を習い始めて、武道が好きになりました。

—— 空手を習うと俺は強くなれる、みたいな気持ちが出てきますよね。

最初は友達と遊び感覚でしたけど、強くなることへのうっすらとした憧れがありましたし、帯を締める、和服に近いような胴着にも惹かれました。

—— 組み手ですか？ 形ですか？

組み手も形もありましたが、組み手の方が好きでした。とにかく楽しかったですね。ずっと続けていきたいと漠然と思っていました。

## 中学入学後、 柔道で頭角をあらわす

—— 小学校卒業後には中高一貫校に行かれました。

これも友達につれられて塾に通い出したら成績が上がっていった。歯科医だった祖母の影響で医者への憧れもあって受験しました。入った中学には空手部がなくて、似たような、と言うと失礼ですけど、同じ武道で胴着を着る柔道部に入ったんです。

—— 練習はどうでした？

最初はすごくつまらなかったです。安全性を担保するために、最初の数ヶ月間はひたすら受け身しかなかったんですね。先輩達が組み合っている姿を見て、自分もいつかこういうことができるんだなと思いつつやっていました。



組み手争い(2008年北京パラリンピック)



(上)幼少期  
(下)片付けの手伝いをする

—— 中高一貫ということ、同じ道場に高校3年生までいるわけですか？

はい、同じ道場に高3まで6学年いました。すごく体格の差もありますし、いきなりヒゲはまうぼうの先輩達のなかに放り込まれたのは新鮮でしたね。

—— 試合をし始めたのは？

中2のはじめの地区大会が最初でした。その最初の試合で、とても気持ちよく投げられたのを覚えています。ただ、場外に出たところだったので「待て」がかかって。試合が再開され、投げられた後なので腹をくって臨んだら勝つことができました。

—— そのころの体格はどうだったのでしょうか？

今160cmなのですが、中学に入ってから今まで3、4cmしか伸びなかったの、あまり変わりません。体格はぼっちゃりしていたと思いますね。柔道を続けるに従って、がっちりした体型になっていきました。

—— 続けるにつれて柔道に対する気持ちの変化などはありましたか？

一緒にスタートした同学年のなかではどうやら強い、というところから1学年、2学年上の先輩にも負けなくなっていって、勝つ喜びが増しました。中1のときにその代のキャプテンに自分が任命されたので、責任感もめばえ、休むこともなく積極的に取り組みました。

—— 当時の指導者は学校の先生ですね。どんな指導を受けましたか？

九州の学校らしく、「気合いだ」と常に言われていました。先生のうちのひとは東京教育大(現筑波大)で柔道をされていた方で、非常にいい指導をしていただきました。

—— 柔道部時代の栄光の試合、というと？

高2のときに、県の新人戦で県のチャンピオンに勝って3位になりました。次の年も3位になって。進学校で時間が少ないわりに国体の強化選手にまでなったのはよかったなと思います。

—— 国体の強化選手ですか。では学校でも重要な生徒と認められたでしょう。

いや、学校は学業第一なので、部活で活躍してもそこまで、というところがありましたね。

## 勉強漬けの中高一貫校時代

—— 柔道漬けの生活というわけではなかったのですか？

勉強漬けのなかに柔道がスパイスで入っているような毎日でした。部活は1日に1時間半、土曜日も1時間半～2時間、日曜は休みでした。学校での授業の後、部活を終えて寮に帰ると夜7時から11時半まで勉強の時間がありました。体育会系の男子校の寮だったので、自習中に寝ていたら厳しく指導されました。

—— では気を抜ける瞬間がなかったのでは？

そうですね、テレビも観られないし、漫画や音楽など、娯楽は禁止でした。

—— 中高一貫の進学校となると、学内の成績争いもすごかったのでしょうか？



高校時代 インターハイ地域予選の校内壮行会で宣誓

毎月テストがあって、中1から高3まで成績優秀者の名前が貼り出されました。

——成績が落ちると部活にしわ寄せが来たりもしたのでは？

そういうことはなかったです。僕は勉強もそれなりで、順位表から外れることもなかったです。

## 弁護士をめざして浪人生活へ

——柔道で将来身を立てようという思いはありませんでしたか？

まったくなかったですね。全国にでも行ければ違ったかもしれませんが、卒業したら柔道とも縁がなくなるだろうなと思っていました。

——入学当初に持っていた医者という夢は？

学年の半分近くが医者の家、医者になる以外の選択肢が許されない同級生が多いという環境のなかで、自分はちょっと違うかなと。自分は文系かな、文系なら弁護士かなと。

——部活を引退してからは相当バリバリ勉強された？

ただ中1のころからずっと勉強漬けの生活ではあったので、劇的に変わることもなかったですね。勉強漬けの学生生活の反動から、進学後に弾けてしまう学生が多くて東大での留年率がとても

高いという学校でした。

——スポーツ界の組織のトップに立つような人には、浪人・留年率がわりと高いんですよね。ですからあんまり後悔する必要はないと思いますが。

はい、僕も浪人しました(笑) 言われて初めてやるタイプだったので高校の先生から「お前は浪人したら長引くぞ」という不吉な予言があったのですが、予言通りになってしまいました。

## 緑内障を発症 まったく何もできなくなった

——その浪人時代に緑内障を発症された。

浪人1年目に右目が見えにくくなって、最初はコンタクトが汚れてるんだなと思っていたんですけど、どうも見えない。病院に行ったところ、緑内障と告げられて。神経が傷む病気で、なくなった視野はもどらない。自分は当時19歳と若かったこともありそんなに深刻に受け止めていませんでしたが、悲しんでいる母を見て、「持っているものを失うのは悲しいことなんだな」とは思ったのを覚えています。

——右目だけのときにはあまり不自由はなかったのですか？

立体視が難しい、投げられた物を受けとれない、3D眼鏡をかけても3Dにならない、カギ穴にカギを入れにくい、などはありました。



高校時代 腕相撲

——そして中央大学に入って、もうひとつのほうの目にもまた。

大学2年の試験が終わったくらいのころで、やっぱり緑内障でした。薬でも点眼でも眼圧が下がらないので、急遽手術して。

——大学でいろいろとやらなければいけないときに、情報をとる目が見えなくなるのは大きなハンディでしたね。

手術する前は文字が読み取れなくなるほどではなく、病院の手続きなどもできたんです。手術をすることで視神経へのダメージが増してもう少し見えなくなると聞いてはいましたが、手術後眼帯をはずしたら思っていたよりも相当見えなくなっていました。今では慣れて歩いたり物を判別したりできますが、当時は歯磨きができない、ご飯も食べられない、文字も読めない、人の顔も見えない。友達が気を利かせて

持ってきてくれたラジカセも、ボタンが見えないので使えない。本当にまったく何もできなくなってしまって、この先つまらないなと思いました。

——そのころと比べると今は、いろんなものを脳の中で計算しながら把握できるようになったということでしょうか？

パラリンピックの真理ではないですが、残されたものを最大限活かすということで、残っている周辺視野を上手に使えるようになったんですね。

——箸でいえば、それまで人差し指、中指、親指でつかんでいたものが小指を使うようになってきた？ そんな感じですね。不格好だけど、なんとか食べられるようになったといううな。

## 「やってみようかな」

### 7年ぶりに柔道着に袖を通す

——そのあと、再び柔道に出会うわけですね。

大学2年で目が悪くなってからは、友達や家族、大学のサポートを受けながらなんとか卒業を目指しました。残された視野にも慣れてきたのは大学4年の夏でしたが、そのころ自分の周りほとんど進路が決まっていたのに対し、僕はまったくの空白だったんです。障害者が仕事をするなんて考えたこともなかったし。そんなときに、当時の彼女に「柔道をやってみたら。視覚障害者柔道っていうのがあるらしいよ」と言われて、やってみようかなと。それが、目が悪くなってから僕が初めて「やってみようかな」と思ったことだったんです。

——どのような流れで柔道を始めたのですか？

大学4年の夏に思い立って、いろいろ調べてから日本視覚障害者柔道連盟という所に電話をしたところ、「県で3位の実績があるなら、試合に出てみたらどうですか？」と。

——いきなりですか？

はい。「11月に大会があるよ」と。もう3カ月後で、7年間もブランクがあるので悩みました。健常者でそれなりに強かった自分が視覚障害者にボコボコにされるのは嫌だなど。でも出ると決断したら、目標ができて、新鮮な気持ちになりました。



高校時代 柔道部(前列右から3人目)

—— そのときの段位は？

高校で2段まで取っていました。中高の柔道部時代の同級生達が僕のために集まってくれて、毎日練習しました。

—— 7年ぶりに柔道着に袖に通したときの気分は覚えていますか？

懐かしさと、新鮮さでしたね。健常者が相手でも組み合えば投げすることもできましたし、目が悪くなってもいけるなど。

—— 一度自転車に乗れるようになったら忘れない、といったような感覚ですか？

そうですね。あと柔道というのは、障害者スポーツのなかで一番健常者スポーツに近いと思うんですね。他のスポーツだとそれなりの工夫を強いられるけれど、柔道は健常者と完全に一緒にできる。連れて来てくれたりサポートしてくれる人をぶん投げたりできるんで、畳の上では平等なんだなというのを肌で感じました。

—— どのくらいの頻度で練習をしていましたか？

週3回くらいですかね。あとは走ったり。目が悪くなってから運動したのは初めてだったので楽しかったですね。体が覚えているというか。また、アテネパラリンピックで銀メダルを獲った選手がいる道場に見学に行って組んでもらったところ、意外といけそうだなと。

—— 相手の強さは奥衿をとって引いてみた瞬間にわかるって言いますよね。

まあ、力の差はありましたが、ボコボコにされるほどの差ではなかったなと。それで手応えを得てまた練習にはげました。

—— そのときは自分の人生も横に置いて？

目が悪くなってから初めてできた目標が11月の全日本視覚障害者柔道大会だったので、まずは打ち込みましたね。そして、本番では優勝することができました。僕の出た90kg級は穴の階級と言われているけど、3、4人しかいなかったのですが、全部一本勝ちでした。そこから人生がガラッと変わりました。



国内大会

## 2つのミラクルで柔道人生が大きく動き出した

—— 目が見えていた時代と比べて自分の戦い方にはどんな違いが生じましたか？

視覚障害者柔道では、お互い襟と襟をとりあって、しっかり組んだ状態から試合が始まります。健常者の柔道では襟をとる前の組み手争いから入ります。僕は背が低く、その組み手争いでいかに自分は有利な組み手を取り、相手にはとらせないかという工夫で勝ち上がっていたこともあって、組み手争いが省略されてしまう違和感は大きかったです。

—— 刀鞘を払って剣先を相手に近づけてからの勝負ということですか？

お互い喉元に刀を突きつけてからの勝負ですね。いつでも斬れるし、いつでも斬られる。

—— でもしっかり優勝された。

その大会は第20回という節目の記念で、皇太子さまがいらっしゃっていて、優勝者とお話をするという機会があったんです。さらにその大会で翌年の世界選手権とアジア大会の代表に内定するという、2つのミラクルがありました。柔道を一生懸命やれば何かいいことがあるな、じゃあ動いていこう、と思えた大会でした。翌年2006年の6月にIBSA柔道世界選手権大会、11月にフェスピック、それに向けた合宿など、まったく白紙だった僕のスケジュールが柔道によって埋まり出しました。

——強化合宿はどんな方法で行われるのですか？  
 僕が参加した当時は、いろんな大学の柔道の練習に混ぜてもらおうというやり方でした。このときは筑波大学に行ったんですが、7年間のブランクから久々に友達とちょっと練習したくらの僕が、当時福見（友子）さんらオリンピック選手がいるような柔道部で普通に合宿しているところに放り込まれて死ぬかと思うほど大変でした。

——参加人数、日数はどうでしたか？合宿の手応えは？

7人くらいで、3～4泊でした。まだ視覚障害者柔道仲間との仲も深まっていなかったのが、精神的にも辛い合宿になりました。視覚障害者ならではのコミュニケーションの方法を僕がよくわかってなかったんですね。お互いに見えていないので、たとえばただ座っていても相手には自分の存在がわからない。また視覚障害者の間では、話すときにまず相手と自分の名前をはっきり言うことが必要です。なんとなく「久しぶり」とか言ってもわからないんです。

——言葉にタグをつけるといった感じですね。

## 100社以上 落ちまくった就職活動

——優勝した、代表になった、大学に帰ってきた。その次は？

帰ってきて大学内でインタビューを受けたときに、今後の抱負を聞かれ、障害者が仕事をできる環境をつくりたい、みたいなことを答えていますね。

——いきなり起業の話ですか？

そもそも障害者が就職できると思っていなかったのもあります。先生と一緒に就職課に行ってくれて、障害者向けの就職相談会のチラシをもらったのが就職活動の始まりでした。当初は、中央大学で法律やってたし、

柔道で優勝して代表にもなってるし、簡単に決まると思っていたんですよ。でも面白いようにエントリーシートで落ちまくって。100社以上受けた中から、なんとか2社に面接してもらえて、そのうちの1社に決まりました。行動してみれば楽しいことがあると柔道でわかったのが、諦めずに就活を続けることができました。

——それで決まったところが、最初に入れたところですか？

はい。いい出会いでした。テンプスタッフという人材派遣会社の特例子会社で、障害者のスタッフが多く、内容は障害者の人材紹介という、今やっている仕事の基礎となる仕事でした。今、僕の経歴をみるとまるで最初からそこを狙ったみたいですけど、実際は選んでいる余裕なんてまったくなくて。

——就職の過程で柔道はどうなりましたか？

大学を卒業した年の5月ごろに内定が出たのですが、6月にフランスでの世界選手権、11月にアジア大会があると会社に相談したところ翌年3月入社にしてもらえたんです。それから1年間、柔道にも打ち込めたし、音声のパソコンの習得など、学ぶ時間も得られました。

## 初めての国際大会で 外国人選手の洗礼を受ける

——世界選手権は初瀬さんにとって初めての国際大会ですね。

選手、スタッフ合わせて20名くらいで、ドゴール空港からワゴン車に乗って17、8時間かけて行きました。プロマーという田園地帯にコテージがいくつかあって、その近くに体育館があって。フランスならではの、選手にワインがふるまわれたりもして、国際大会って楽しいなと思いました。学生のノリの観光の延長みたいな感覚でしたね。

——試合の方は？

1試合目ですぐ負けました（笑）日本の大会で勝ったばかりで視覚障害者柔道を舐めていたんですね。海外の選手にボコボコにされました。ウクライナの選手が相手で、崩れたところでひっくり返されて抑えられて。敗者復活戦に回ったら何かの



大会の金メダリストと当たってまた負けて。翌日の団体戦でも2回くらい負けましたし、海外の選手は本当に強いなと思いました。

—— 海外の選手は何が強かったですか？

味わったことのないパワーというか。組んでから始める柔道なので、まともに受けてしまうんですね。力でばしっと止められて、全然動けなかったです。

—— 初の国際大会を終えての感想は？

外国人と試合をするのは初めてだったので緊張しました。海外の選手はこんなに違うという驚きと、胴着をこんなにピッチピチにして着て反則じゃないのか、といった感想も持ちました。

## 全敗から一転、 フェスピックで金メダル

—— 世界で苦い思いをした。そこからの初瀬さんは？

一生懸命やるようになりましたね。練習を受け入れてくれるようなところを積極的に探して。それま



世界選手権で日本選手団の騎手を務める(2006年フランス)



フェスピックで金メダル(2006年クアラルンプール)

で健常者と練習するときは遠慮もあり、組み手争いからやったりしていたのですが、お願いして最初から組んでもらうようにしました。

—— 組んでから始めるときの、相手の力をそぐ手法はどんなものですか？

しっかり動くってことと、組み手をずらすような動きですね。僕らの柔道は釣り手は鎖骨の下、引き手はどこどこ、というふうにつつまるところが厳しく決められています。ルールとしてまだまだこれから考えて行かなきゃいけない部分はありますが、しっかり組んで投げるといふ講道館の理想とする柔道に近いかもしれない。

—— そして11月にクアラルンプールで行われたフェスピックで金メダルをとりました。心技体充実の大会でしたか？

はい。投げ技でばんばん一本をとって、自分のなかではよい柔道ができたと思います。初めてドーピング検査も経験して、優勝したんだという実感がわいてきました。

## パラリンピックで初めて感じた 代表の重圧

2007年に就職したあとブラジルで世界選手権があって、1回戦でアメリカの選手に腕ひしぎ十字固めで負けて。北京パラリンピックは難しいかなと思いました。全日本視覚障害者柔道大会で優勝して、出られることになりました。2006年から90kg級ではずっと僕が優勝していたので出る責任も感じましたし、そこで代表の意識が初めて芽生えました。

—— 練習の量や質などに変化はありましたか？

就職のタイミングで池袋に引っ越し、柔道の環境を新たにつくりなおすのに苦労している時期でしたが、ちょうどロケーション的に都合のよい所にブラジリアン柔術の道場を見つけて、ブラジルで寝技で負けて寝技を克服しようと思っていたこともあり活用しました。北京が決まってからは会社もアスリート支援制度をつくってくれて予算も出してくれたので、練習時間も確保できたしトレーニングジムにもお金が払えました。



——パラリンピックというと俄然ステータスの大きい大会ですね。

選手団で集まって壮行会をやったり、全員揃いのスーツをもらったり、経験したことのないことだらけでした。日本代表、日本選手団として向かうというのを強く感じましたし、会社や、今まで心配をかけてきた親や友達の期待も背負って、これまで感じたことのない重圧にびっくりしました。

## パラリンピック出場を契機に さらに人生が広がる

——そして、本番は？

負けてしまいました。相手は銅メダルをとった選手だったんですが、指導ひとつで敗れてしまって。ただ自分の中では、5分間フルで戦ってやれることはやれたという手応えがありました。畳が輝いているというか、こんなところで柔道をできる幸せを感じましたね。パラリンピックを経験したことで人生が広がっていったのもよかったです。

——どのように広がっていききましたか？

やはりパラリンピック関係でお話をいただくことが多くなってきて。障害者スポーツにおいてパラリンピックに出たかどうかというのはすごく大きくて、出ていなければ、いかに強い選手でも愛好家、趣味の領域に入れられてしまうんですね。

——パラリンピックの畳を踏んでいるか踏んでないかで周りの評価も変わってくる。

そうです。だから有望な若手には「出れるんなら絶対出たほうがいいから死ぬ気でやったほうがいい」と言います。

——そのあと、フェスピックが形を変えてアジアパラ競技大会になりました。そこでは実力をいかんなく発揮されましたね。

2010年のアジアパラ競技大会では全部一本勝ちで、いい柔道ができました。少し前にトルコで開催された世界選手権でさくっと一本をとられた相手と決勝であたって、腹をくくって最初からガンガン攻めたらしっかり勝つことができました。

——お話を聞いていると、1回目にうまくいかなくても2回目で成功する人生ですね。そして、会社をご自身で興される。

2011年の10月に会社をやめて12月に起業しました。もともと障害者の雇用をつくりたいという思いがあったなかで、11年には震災もあって。保障されてる明日なんてないということ、震災は僕に思い出させてくれたんですね。30歳になり、自分の考えで行動するのではなく会社員としてロールプレイに終始していることに悶々としていた時期でもありました。同世代と比べると給料も安かったし、やめてもそんなにリスクはないかなと計算して動きました。

——2020年の前にはリオデジャネイロパラリンピックがあります。ご自身としてリオは視野に？



激しい攻防(2008年北京パラリンピック)



アジアパラ競技大会で金メダル(2010年広州)



JADA(日本アンチドーピング機構)の「PLAY TRUE 2020」活動に協力(右から2人目)

リオでメダルを獲得することを目指してがんばっているところです。難しくれば2020年東京を。色んな人に引退しろって言われるんですけどね。初瀬さんがいくら柔道をがんばっても獲れるメダルは1個だよ、でも柔道連盟でがんばれば10個も20個も獲れるよと(笑)

## スポーツを通じて ユニバーサルな社会を つくりたい

——日本の障害者スポーツを取り巻く環境について、1歩2歩進めるために必要なことは何でしょうか？

これからは国内競技連盟(NF)と障害者スポーツ団体との関係強化がとても大切になってくると思うんですね。お互いの資源活用の意味もあります。このほど視覚障害者柔道連盟が全日本柔道連盟の傘下に入り、積極的に協力し合おうというすごくいい関係ができています。それがいろんな競技団体に波及していけば、日本ではスポーツを通じてユニバーサルな社会ができていくと思います。

——初瀬さんは厳しい状況の中、大学4年で柔道着をもう一度着るという決断をされました。視覚障害があることでスポーツに一步踏み出せない子ども達への手の差し伸べ方はどうでしょうか？  
今は統合教育が進んでいて、視覚障害児がみな盲学校に行くわけではない。一般の中にいる視覚障害者にはなかなか手が届きにくいんです。現在、障害者がスポーツに辿りつきかけは知人からの紹介というのがすごく多いのですが、

もっと直の、お医者さんとかりハビリ施設とかからの紹介があればより普及していくと思います。

——今年の4月には文部科学省に障害者スポーツ関連が移管し、10月にはスポーツ庁ができます。

望むこととしては、障害者スポーツをリハビリという面ではなく、スポーツという側面から普及していただきたい。スポーツとしてカッコいいなるところから始まると思います。パラリンピック種目でない障害者スポーツの存在も、忘れられないよう引き立ててほしいですね。また、東京は割合スポーツにアクセスしやすい環境ですが、地方がまだまだです。施設がなかったり、団体競技で選手が集まらなかったり、用具や移動手段でのハンディが大きかったり。健常者スポーツに比べてお金がかかるというところで、助成金など補助があるというと思います。

——パラリンピックを観る人にはどういったところを観てもらいたい？  
どんなスポーツも、ルールがわからないと面白くないですよね。メディアの方にはルールをもっと伝えていただけないなと思います。

——2020年の後に遺したいレガシーは？

障害者スポーツをスポーツとして楽しむ文化ができると思います。2020年パラリンピックの会場を満席にして、そこから2030年、40年に障害者スポーツを観に行く人達がいる文化につながっていけばいいと思います。

——初瀬さん自身の今後の夢は？

僕自身が2020年東京で畳の上立つというのが夢ですね。あとは、アテネまでは日本選手がすごくメダルを獲ってきていたので、その日本の視覚障害者柔道を再生したいです。  
また、街なかに障害のある人々がいることが普通の光景となるように、障害者雇用の面から貢献したいと思います。

——今日はありがとうございました。

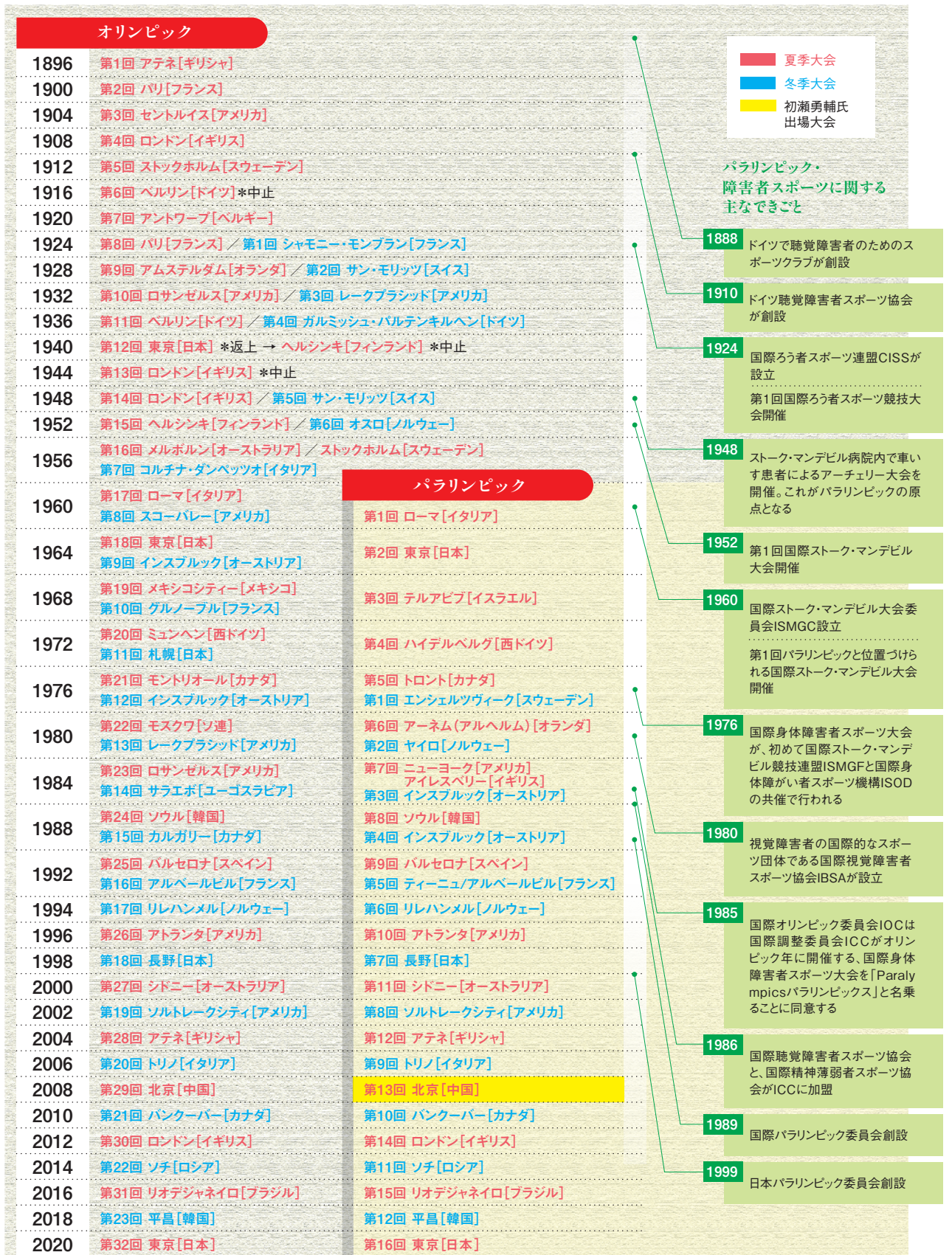


2008年 北京パラリンピック開会式

- 1931 京都府立盲学校ではじめて、当時の体操科の内容に柔道が取り入れられた  
昭和6
- 1945 第二次世界大戦が終戦
  - 1947 日本国憲法が施行
  - 1950 朝鮮戦争が勃発
  - 1951 安全保障条約を締結
  - 1955 日本の高度経済成長の開始
- 1963 第1回全国盲学生柔道大会、神戸市にて開催  
昭和38
- 1964 東海道新幹線が開業
- 1967 第1回東海地区盲学校柔道研究大会開催  
昭和42
- 1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸
- 1971 第1回東海地区盲学校柔道大会開催  
昭和46
- 1973 オイルショックが始まる
  - 1976 ロッキード事件が表面化
  - 1978 日中平和友好条約を調印
- 1980 初瀬勇輔氏、長崎県に生まれる
- 1981 IBSA(国際視覚障害者スポーツ協会)結成  
昭和56
- 1982 東北、上越新幹線が開業
- 1986 日本視覚障害者柔道連盟設立  
昭和61
- 第1回全日本視覚障害者柔道大会、講道館にて開催
- 1988 フランス・国際盲人柔道大会に日本選手1名が参加し、無差別オープン試合で優勝を果たす  
昭和63
- ソウルパラリンピック開催  
日本選手6名参加  
金メダル4個、銀メダル2個獲得
- 1991 国際視覚障害者柔道選手権東京大会開催  
平成3
- 1992 バルセロナパラリンピック開催  
平成4
- 日本選手7名参加  
金メダル2個、銀メダル3個、銅メダル2個を獲得
- 1995 阪神・淡路大震災が発生
- 1996 アトランタパラリンピック開催  
平成8
- 日本選手7名参加  
金メダル2個、銀メダル1個、銅メダル1個を獲得
- 1997 香港が中国に返還される
- 1998 世界盲人スポーツ選手権マドリード大会開催  
平成10
- 1999 日本視覚障害者柔道連盟、日本パラリンピック委員会(JPC)に加盟  
平成11

- 2000 シドニーパラリンピック開催  
平成12
- 日本選手5名参加  
金メダル1個、銅メダル2個を獲得
- 2004 アテネパラリンピック開催  
平成16
- 日本選手7名参加  
金メダル1個、銀メダル2個、銅メダル1個を獲得  
この大会から女子の競技が正式種目となる
- 2004 初瀬勇輔氏、弁護士を目指していた在学中、緑内障により視覚障害を持つ
  - 2005 初瀬勇輔氏、高校時代に打ち込んだ柔道を再開することで、障害を克服  
初瀬勇輔氏、全日本視覚障害者柔道大会90kg級にて初優勝を果たす
  - 2006 初瀬勇輔氏、フェスピックアラルンプール大会90kg級にて優勝
- 2008 北京パラリンピック開催  
平成20
- 日本選手9名参加  
銀メダル1個を獲得  
第1回全国視覚障害者学生柔道大会、広島市にて開催
- 2008 初瀬勇輔氏、柔道再開時からの目標であった北京パラリンピック出場を果たす
  - 2008 リーマンショックが起こる
- 2010 初瀬勇輔氏、広州2010アジアパラ競技大会90kg級にて金メダルを獲得
- 2011 初瀬勇輔氏、全日本視覚障害者柔道大会90kg級にて7連覇を果たす  
初瀬勇輔氏、株式会社ユニバーサルスタイル設立(障害者雇用コンサルティング会社)  
視覚障害者柔道の選手として活動を続けながら、障害者の雇用や社会進出により貢献するための活動も行う
  - 2011 東日本大震災が発生
- 2012 初瀬勇輔氏、全日本視覚障害者柔道大会81kg級にて優勝
- 2013 初瀬勇輔氏、全日本視覚障害者柔道大会81kg級にて2連覇を果たす
- 2014 初瀬勇輔氏、インチョン2014アジアパラ競技大会81kg級にて銅メダルを獲得  
初瀬勇輔氏、全日本視覚障害者柔道大会81kg級にて準優勝  
初瀬勇輔氏、長崎県県民表彰特別賞を受賞

オリンピック・パラリンピック年表





幼少期



高校時代 柔道部(前列右から3人目)



片付けの手伝いをする



高校時代 腕相撲



高校時代 インターハイ地域予選の校内壮行会で宣誓



国内大会



世界選手権で日本選手団の旗手を務める(2006年フランス)



フェスピックで金メダル(2006年クアラルンプール)



組み手争い(2008年北京パラリンピック)



激しい攻防(2008年北京パラリンピック)



厳しい表情で試合に臨む(2008年北京パラリンピック)



JADA(日本アンチドーピング機構)の「PLAY TRUE 2020」活動に協力(右から2人目)



アジアパラ競技大会で金メダル(2010年広州)



初瀬勇輔



2008年 北京パラリンピック開会式